

# 明石の君から浮舟へ

——うき舟・うき木・小町——

大竹明香

## はじめに

『源氏物語』には多くの和歌が配されているが、作中、二例しか用いられていない歌語に、水辺を浮遊する「うき木」と「うき舟」がある。

いくかへりゆきかふ秋をすぐしつうき木にのりてわれかへ  
るらん  
(松風②四〇七)

心こそうき世の岸をはなると行く方も知らぬあまのうき木  
を  
(手習⑥三四二)

いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひきにけん  
(薄雲②四六六)

橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ

(浮舟⑥一五一)

これらは、明石の君と浮舟の詠歌である。『源氏物語』中二例しかない「うき木」「うき舟」の語が、明石の君と浮舟の詠歌の中にだけ表われることの意味は大きい。明石の君と浮舟は、ともに水辺にその身を置く人物である。水辺をたゆたう、浮遊する「うき舟」と「うき木」。この二つの語から、明石の君と浮舟との連環は、どのように捉えられるのだろうか。

## 一 歌語「うき舟」

水辺に身を置き、さすらう浮舟。浮舟は作中に語られる女君たちの中で最も多くの歌を詠んでおり、浮舟の和歌については、これまでさまざまに論じられてきた。彼女の心の内やその存在の語られ方などを読み解く一つの方法として、浮舟の和歌は重要な意味を有している。

浮舟が和歌に詠んだ「うき舟」について『歌ことば歌枕大辞典』<sup>4)</sup>には、「水上に浮かんだ小舟。「うきたるふね」と詠まれることもある。(中略)行く手を失った漂う舟として詠まれ、多くは、

迷いさすらう心や身の比喩となる」と説明されている。浮舟巻に詠まれた水に浮かぶ「うき舟」の語は、寄る辺なさや行く先の不透明な心細さを描出する。作中に語られる浮舟という女君の、その境遇を的確に表わしているといえよう。<sup>5</sup>

ではここで、歌語「うき舟」「うきたる舟」が、『源氏物語』成立前の和歌においてどのように詠まれているのか確認したい。以下に用例をあげる。<sup>6</sup>

①一つには麗しき絹・綾など入れて、孫王の君に心ざし、黄金の船に物入れながら、かく聞こえて、あて宮に奉る。

荒るる海に泊りも知らぬうき船に波の静けき浦もあらなむ

（『うつほ物語』吹上・上・二七六）<sup>7</sup>

②侍従の君、

こひをのみたがりて落つる涙川身をうき船のがれますかな

（『うつほ物語』菊の宴・三四〇）

③あるをとこのものいひ侍りける女の、しのびてにげ侍りて、としごろありてせうそこして侍りけるに、をとこのよみ侍りける

……きみにより かひなきこひに なにしかも 我のみひとり  
うきふねの こがれてよには わたるらん……

（拾遺和歌集・巻第九・雑下・五七三・よみ人しらず）

④よるきじなく

わたつうみのなみにまどへるうきふねはよるきじなくてわび

しかるらん

（藤六集・三三三）

⑤わづらひたまでほとほとしかりつるとて、をんなのもとにかぜはやきびびきのなだのふねよりもいきがたかりしほどは  
きさきや

返し

よるべなみかざまをまちしうきふねのよそにこがれしわれぞ  
まさりし

（一条撰政御集・一七六・一七七）

⑥しまのほとりに、ふねさしいづ

いくくもゐるすぎてゆくらんふくかぜにをちのしまねをつたふ  
うき舟

（高遠集・三三二）

⑦のぼる道のが歌

おもひきや 身のうき舟に のりしより おほくの月日 こ  
がれつつ いつしかはなの みやこにて ころほかに あ  
りへしも よのつねならぬ ことはなほ……

（高遠集・二二九）

⑧なくなりにける人の思ひにて、舟の中にて

うき舟にのりてうかるるわが身にはむねのけぶりぞくもとな  
りける

（高遠集・二四七）

⑨ともかくもいへ、といふをここに

そのかたとさしてもよらぬうき舟のまたこぎはなれ思ふとも

なし (和泉式部集・四二四)

⑩をとこのけしきやうやうつらげに見えければ

心からうきたる舟にのりそめてひと日も浪にぬれぬ日ぞなき

(後撰和歌集・卷第十一・恋三・七七九・小町)

⑪夕だちしぬべしとて、そらのくもりてひらめくに

かきくもりゆふだつなみのあらければうきたる舟ぞしづこ

ろなき (紫式部集・二二)

「うき舟」の語は、『うつほ物語』の、仲忠と仲澄がそれぞれあて宮への恋情を詠んだ歌に用いられ(①②)、勅撰集では『拾遺和歌集』の長歌に詠まれた一例があり(③)、多くは私家集にその用例を見出すことができる(④⑤⑥⑦⑧⑨)。「浮き」と「憂き」との掛詞から、浮遊する様や、自身の「憂き」ことを表わす歌がほとんどである(①②③④⑤⑦⑧⑨)。舟から「漕ぐ」との語が導かれ(⑨)、「漕がれ」に「焦がれ」を掛けて詠まれているものもある(②③⑤⑦)。また、「うきたる舟」は二例のみ(⑩⑪)で、これは小町と紫式部の詠歌であることも、特徴の一つである。

田中隆昭氏は①②③④⑤⑦⑨⑩⑪と、『源氏物語』以降の「うき舟」の用例から、『源氏物語』の作中人物浮舟にとつての「浮」との語が重要な意味を有していることを述べ、また、小町谷照彦氏は、これら「うき舟」の用例(①②③④⑤⑧⑨)から歌語「うき舟」について、「漂流、漂白を表象する歌ことばであり、掛詞的に憂愁を連想させるものでもあった」と述べる。さらに、「う

きたる舟」については、⑩⑪の小町と紫式部の詠歌をあげながら、「漂白は、小野小町のなみの一つであり、浮舟の造型にも投影しているはずである。「浮きたる舟」にも、「憂き」を見ることは可能であろう」と、『源氏物語』の女君浮舟に、小町の歌の影響のあることを指摘している。

物語における歌語「うき舟」は、『うつほ物語』では、あて宮への恋情を抱く男君の心情を、海に浮かぶ「うき舟」に喩えているが、『源氏物語』は、水辺に身を置く女君二人——明石の君と浮舟に用いられていることが、その特徴としてあげられる。

## 二 歌語「うき木」

さて、これまで確認した「うき舟」にくわえて、もうひとつ、明石の君と浮舟が詠んだ「うき木」についても確認したい。以下に、『源氏物語』成立以前のものとおぼしい歌をあげる。

①うき木といふ心を

ながれ木も三とせ有りてはあひ見てん世のうき事ぞかへらざりける (拾遺和歌集・卷第八・雑上・四八〇)

②女院御八講捧物にかねしてかめのかたをつくりてよみ侍りける  
ごふつくすみたらし河のかめなればのりのうききにあはぬなりけり (拾遺和歌集・卷第二〇・哀傷・一三三七・斎院)

③あきのなみいたくなたちそおもほえずうききにのりてゆくひと

のため

(躬恒集・一二)

(4)る中へやるふみのあけどころに

あまのがはうききにのれるわれならば君があたりにいまはき  
なまし  
(小大君集・九五)

(5)心似雲木浮水上

心をしあまのうき木になしつればなる水にしづまざりけ  
り(千里集・一〇七・赤人集では第五句「しづまざりける」)

(6)人めなきやまにもみとはいれつれどかくれぬものはうききなり  
けり  
(賀茂保憲女集・一八九)

(7)しのびたりし人のもとより

あざごとになるる床のまくらかなわれもうき木のここのち  
みして  
(馬内侍集・五二)

(8)天河にて

あまのがはかよふうききにこととはむもみぢのはしはちるや  
ちらずや  
(実方集・二二)

(9)返し

ただちにはたれかふみむあまのがはうききにのれるよはか  
はるとも  
(実方集・九三)

(10)七月七日、うききに

あまのがはかよふうききのとしをへていくそかへりのあきを  
しるらむ  
(実方集・三二五)

(11)妙莊嚴王品

又如一眼之亀、值浮木孔、而我等宿福深厚、生值仏法  
ひとめてたのみかけつる浮木には乗りはつるべき心地やは  
する  
(発心和歌集・五一)

(12)ほうりにためもしほうまうであひておとせで出でにけるつと  
めて

なみのよにあふことかたきかめ山のうききをただにかへすべ  
しやは  
(公任集・三六四)

(13)返し

天河あとをたづぬる世なりせばあふ事やすきうききならま  
し  
(公任集・三六五)

(14)七月七日、説法をさすと聞きてやりし

たまさかにうき木よりける天の川かめのすみかをつけずや有  
るべき  
(赤染衛門集・二二)

これらの和歌の特徴としては、歌語「うき木」が張翥が天の川  
を「うき木」に乗って下つたという天漢訪問譚に因わって多く詠  
まれるもの(3)(4)(5)(8)(9)(10)(14)であることを表わしている。くわ

えて、「浮」に「憂き」をかけているものもある(1)(6)(7)。また、説法など、仏法に関するもの(2)(6)(11)(12)(13)(14)などが確認できるが、これらは、『涅槃経』の「盲亀浮木」を題材としたものである。<sup>11)</sup>

先にあげた『源氏物語』における歌語「うき木」についても、諸注釈において天漢訪問譚を下敷きとする解釈がなされている。

後藤祥子氏は、「浮木」の語と天漢訪問譚の関係を考究した上で、『源氏物語』における「うき木」の語について、浮遊していく心細さを意味する語であるとし、さらに河野貴美子氏は、中国発祥の天漢訪問譚による「うき木」の語と、松風巻の巻末にある七夕表現に着目する。<sup>12)</sup> 佐藤佳代子氏は、明石の君の「うき木」は張翥の「浮木」であるのに対して、浮舟の「うき木」は出家後の手習の独詠歌の中に現われることから、「盲亀浮木」の説話を重ね合わせて仏法と会い難い浮舟の在り方を読み取る。<sup>13)</sup> なお、吉井美弥子氏は、浮舟にまつわる七夕表現と歌語「うき木」に着目し、「浮木」は、浮舟の行く方を何も示さない物語のあり方を表わしていることを指摘する。<sup>14)</sup> ただし、先に見たように、「うき木」は「うき舟」同様、水辺を漂う、浮遊する心細さを表出する語として用いられる歌があることも、ここでは押さえておきたい。

### 三 明石の君の立場

さて、「はじめに」で述べた問題に戻ろう。明石の君と浮舟にのみ、「うき木」と「うき舟」の語が用いられているのであるから、この二人の女君に通底するものとして、やはり男君との懸隔

に起因する、その身の不安定さが想起される。ここでは明石の君の立場について、作中の表現から確認したい。

作中における明石の君の初出は若紫巻であり、前播磨守である父は、代々の国司からの求婚を拒み、「……『……もし我に後れず、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる」(若紫①二〇四)、高き志を遂げられそうにない場合は、海にその身を投げよ、と言われている娘がいると、源氏と供人たちの会話の中に語られる。海辺に住まい、さらには、その身を海へ投げよと言われている明石の君はその初出から、身分違いの縁を望まれるさだめを負っている。その後、須磨へ流離していた源氏との縁を確信した父入道によって、明石の地へと迎えられた源氏と邂逅するが、都からの許しを得た源氏は帰京することとなる。その際、明石の君の心中は以下のように語られている。

正身の心地たとふべき方なくて、かうしも人に見えじと思ひしづむれど、身のうきをもとにて、わりなきことなれど、うち棄てたまへる恨みのやる方なきに、面影そひて忘れがたきに、たけきこととはただ涙に沈めり。母君も慰めわびて、  
……  
(明石②二七〇)

源氏に見捨てられる恨みはどうにもやり場のない思いであるが、見捨てられる原因はといえば、「身のうきをもとにて」と、明石の君自身の宿世であるという。鄙の地にて源氏と恋仲になったものの、もとはといえば身分違いであり、源氏に比べて身分の

低い明石の君が捨てられて恨むことについて、語り手は「わりなきこと」、道理に合わない、つまり源氏を恨む立場にないとする。

明石の地に捨て置かれても仕方のない立場である明石の君。彼女は、この時懐妊していたが、阿部秋生氏は、生まれた子が男の子であったならば、母子ともに明石の地に捨て置かれた可能性があることを指摘する<sup>16</sup>。明石の君の立場はとても弱く、源氏との身分の差が明白であることを、ここでは確認しておきたい。

もうひとつ、明石の君の立場が表われている叙述がある。濡標巻に語られる、以下の場面を見てみよう。

なかなか、この御ありさまをはるかに見るも、身のほど口惜しうおほゆ、さすがにかけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だに、もの思ひなげにて仕うまつるを色節に思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけておほつかなく思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らず立ち出でつらむ、など思ひつづくるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。  
(濡標②三〇二—三〇三)

源氏一行の様子に対し、明石の君は「身のほど」を嘆き、続けて、「かく口惜しき際の者」、源氏に従っている身分の低い者たちでさえ、晴れがましく名誉なことと思っているのに対して、自分は「何の罪深き身にて」、源氏の一行がここへやってくることを知らないでいたのか、との明石の君の心内語である。この住吉参詣の時、源氏は陸路にて華々しく都から参詣に来ていたのに対して、水辺に身を置く明石の君は「舟にて詣でたり」(濡標②三〇

二)と、舟に乗って住吉参詣に来ていたのであった。<sup>17</sup>

道のままに、かひある逍遥遊びののしりたまへど、御心にはなほかりて思しやる。遊女どもの集ひ参ひれる、上達部と聞こゆれど若やかに事好ましげなるは、みな目とどめたまふべかめり。されど、いでや、をかしきこともものあはれも人からこそあべけれ、なのめなることをだに、すこしあはき方に寄りぬるは、心とどむるたよりもなきものを、と思すに、おのがこころをやりてよしめきあへるも疎ましう思しけり。  
(濡標②三〇七—三〇八)

住吉参詣の際、源氏と明石の君は歌を贈り、その帰り、源氏は遊女たちとすれ違う。源氏は、明石の君を思い浮かべながら、恋の情趣は相手の人柄いかんによるもの、その場限りの遊女との戯れには心惹かれなれないと思ひ、媚を売る遊女たちに嫌悪感を抱いている。ここで源氏は明石の君への思いを再確認しているが、その際に、明石の君が遊女と比較されていることに注目したい。

なぜ、明石の君と遊女の比較が語られているのだろうか。先に見た「何の罪深き身」とは、明石の君の前世の罪が現在の源氏と自身の身分差の原因であるとの意であるが、「罪深き身」は、遊女も同様に抱えているものであるから、源氏と明石の君との身分の懸隔は、源氏と遊女との身分の懸隔と重なるからではないのか。つまり、源氏との関係において、明石の君の身分は遊女にかぎりなく近いものであることを、源氏一行を目の当たりにした明石の君の心中と、この遊女との比較から読み取ることができらう。

明石の君の立場は、それだけ不安定なものなのである。

「舟」、「水辺」、「罪深き身」、「遊女」。これらは「浮遊」のものであり、いふなればそれは、宇治川の傍にその身を置く浮舟と重なるものではなかったか。浮舟は、匂宮との関係において、時方から、「女こそ罪深うおはするものはあれ。……」（浮舟⑥一三四）と、その身は罪深きものとされている。明石の君と浮舟と浮遊。その身の不安定さが重なり合ってくるのである。

#### 四 明石の君と浮舟の「うき木」と「うき舟」

これまで、明石の君と浮舟について、その身の不安定なあり方について確認したが、ここでいまい度、「はじめに」で述べた『源氏物語』における「うき木」と「うき舟」が詠まれている歌に立ち返ってみたい。

A 辰の刻に舟出したまふ。昔人もあはれと言ひける浦の朝霧隔たりゆくままにもの悲しくて、（中略）尼君は泣きたまふ。

かの岸に心寄りにし あま舟のそむきしかたにこぎかへるかな

御方、

いくかへりゆきかふ秋をすぐしつづうき木にのりてわれかへるらん

思ふ方の風にて、限りける日違へず入りたまひぬ。人に見咎められじの心もあれば、道のほども軽らかにしなしたり。

（松風②四〇六一—四〇七）

明石の地から姫君を伴い舟に乗って上京する際の明石の君の歌に、「うき木」の語が見出せる。母である尼君の歌には「あま舟」とあり、自身が「尼」であることの意を掛けて、舟に乗って京へ帰ると詠むのに対し、明石の君の歌は「うき木」に乗って京へ帰るとする。舟ではなく「うき木」と詠むことによって、この先の不安な心情が表出されると解すことができる。

B いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふもをかし。「かかる住まひにしほじまざらましかは、めづらかにおほえまし」とのたまふに、

「いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひきにけん

思ひこそまがへられはべれ」と聞こゆれば、

「あさからぬしたの思ひをしらねばやなほ篝火の影はさわげろ

誰うきもの」とおし返し恨みたまへる。おほかたもの静かに思さるころなれば、尊きことどもに御心とまりて、例よりは日ごろ経たまふにや、すこし思ひ紛れけむとぞ。

（薄雲②四六六）

これは、薄雲巻の巻末に語られている場面である。姫君を手放し、源氏の訪れを一人待つ明石の君の歌は、自身を「憂き」ものとし、「うき舟」は、明石の浦から自らを慕ってついできたのでしょうか、つまり、「身の憂き」ことは明石の浦にいたところから

続くものとする。

では、浮舟の詠歌はどうであろうか。

b

いとほかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもいとらうたしと思す。有明の月澄みのほりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橋の小島」と申して、御舟しばしさとめたるを見たまへば、大きやかなる岩のさまして、されたる常盤木の影しげれり。「かれ見たまへ。いとほかなけれど、千年も経べき緑の深さを」とのたまひて、

年経ともかはらぬものか橋の小島のさきに契る心は

女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

橋の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬをりから、人のさまに、をかしくのみ、何ごとも思しなす。

(浮舟⑥一五〇—一五一)

匂宮と対岸へと渡る際、浮舟は自身に乗っている舟について、

「いとほかなげなるもの」といつも眺め、舟が岸を離れていくにしたがつて「心細くおぼえて」などと認識している。<sup>19</sup>そして、「このうき舟ぞゆくへ知られぬ」と、自身がこの先どこへ向かつていくのか見つめている。<sup>20</sup>

a

いとをかしく見えし髪を、たしかに見せよと、一夜も語らひしかば、さるべからむをりにと言ひしものを、といと

口惜しうて、たち返り、「聞こえん方なきは、

岸とほく漕ぎはなるらむあま舟にのりおくれじといそがるかな」

例ならず取りて見たまふ。もののあはれなるをりに、今は、と思ふもあはれなるものから、いかが思さるらん、いとほかなきものの端に、

心こそうき世の岸をはなるれど行く方も知らぬあまのうき木を

と、例の、手習にしたまへるを包みて奉る。

(手習⑥三四一—三四二)

小野の地で出家を果たした後、たびたび訪ねてくる中將からの歌への返歌として、手習歌として詠まれた浮舟の歌には、「うき木」の語が見出せる。ここでも「うき木」は「行く方も知らぬ」と、どこを漂っていくかわからないと詠まれており、先行きのわからない我が身を表出しており、またAの場面同様に、先に詠まれた中將の歌には「あま舟」の語があるが、ここでは浮舟が尼であるとの意として詠まれている。

また、Aとaは、歌が詠まれる状況は異なるものの、「あま舟」「うき木」と、歌語が共通して用いられている点が注目される。

これは偶然の一致ではなく、「うき舟」の語も二人に共通して見出せることと考え合わせると、明石の君と浮舟の境遇を表わす語として選び取られていると考えられよう。浮舟は、薫と匂宮にとつては、身分の差が歴然とした人である。

一方の明石の君も、源氏との身分差に起因するその立場は、先



行きわからない不安定なものであった。しかしそれは、明石の地で源氏と邂逅し、姫君を伴って大堰の地へと移り、姫君を手放すまでが最も顕著であり、六条院へとその身を移してからは、姫君との再会を「待つ」ことや、源氏の妻妾たちとの関係などの身の処し方が彼女の主題へと変わっていく。明石の君は作中二二首の歌を詠んでいるが、「水辺」に関する語は、六条院へ移ってから、ほとんど見受けられなくなる。つまり、その身が水辺から離れていくことにより、身の不安定なことからも離れていくといえる。

では、浮舟はどうか。浮舟の身は水辺から離れていくどころか、自らその身を宇治川へと近づけてしまう。このことは、二人の女君が詠んだ、「うき舟」と「うき木」の語についても見受けられるものである。配されているその位置に着目すると、明石の君は「うき木」(A)から「うき舟」(B)へと歌語が用いられ、「うき舟」が詠み込まれたBの歌が置かれる薄雲巻巻末以後、彼女は六条院へと移るため、水辺から離れる。一方で浮舟は、「うき舟」(b)から「うき木」(a)へと、用いられる歌語が明石の君とは順番が逆転しているのである。二つの歌語の配置は明石の君と浮舟の境遇の差異を表わしており、浮舟の詠歌に見える歌語は、舟から木へと、より「浮遊」する様を表出させる意として用いられていると考えられるのだが、いったいなぜ、浮舟はより浮遊していくのだろうか。

## 五 浮舟と小町

浮舟と浮遊を繋ぐものはいったい何か。もう一つの語として、水辺を漂う「浮草」があげられる。「浮草」の表現は『源氏物語』においては浮舟巻に見出すことができる。

浮舟巻で浮舟は、薫によつて京へと迎えられることとなっていた。京へ移る日取りも決まっていた浮舟の心中は、以下のように語られている。

大将殿は、四月の十日とぞなん定めたまへりける。さそふ水  
あらばとは思はず、いとあやしく、いかにしなすべき身にか  
あらむと、浮きたる心地のみすれば、母の御もとにしばし渡  
りて、思ひめぐらすほどあらんと思せど、……

(浮舟⑥ 一六三)

薫と匂宮、二人の男君との関係に悩む浮舟は、「さそふ水あらばとは思はず」と、薫に誘われる気持ちにはなれず、自分の身どのようにするべきか、「浮きたる心地のみすれば」と、その身の定まらない思いを抱えていることが語られている。ここでの引歌は、『古今集』に入集している小野小町詠、

わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむと  
ぞ思ふ

(巻第十八・雑歌下・九三八)

である。小町詠歌は「文屋のやすひでみかはのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる」との詞書を持つ。男の誘いに対する小町の返歌は、わが身を「うき草」とし、そのうき草の根を断ち切つて、誘う水があるならばその身を任せようとの意である。「うき草」の「うき」は「憂き」との掛詞であり、小町はわが身を「憂き」ものであると詠んでいる。

対して浮舟は、「さそふ水あらばとは思はず」「浮きたる心地のみすれば」とあるので、薫という「さそふ水」に流されることを選ばず、うき草の根を断ち切つてただ浮いている心地だと、その心中が表出されている。根を断ち切つた浮草は、一つ所に留まり続けることはできない。浮舟はこの後、自ら水辺へとその身を誘うことになるのである。

ここでは、浮舟の心中を語る叙述において、水辺に関わる語を詠み込んでいる小野小町詠歌による引歌表現が見受けられることを注視したい。水辺をたゆたう、浮遊していく浮舟の心中を語る言葉のなかにおいて、ここでは明確に、「浮草」の意を導く表現として小町の歌が選り取られており、浮舟に小町の影響が確認できるのである。

もうすこし、小町詠歌の言葉に分け入ってみよう。小町の歌にある「浮草」は、漢詩語の「浮萍」の翻訳語であるとの指摘がある。大塚英子氏は、「浮萍」は中国六朝時代の閩怨詩において、女性の一生に准えられている語であること、唐代の白居易の漢詩「九江春望」に、「飄泊浮萍是我身」と、杭州に身を置く我が身をよむ一節があることにも着目している。また、詩の表現から生まれた歌語について、大江千里の『句代和歌』の題にある白居易の

「想東遊五十韻 并序」の一節、「幻世春來夢 浮生水上漚」などをあげ、さらに「不繫舟」との漢詩語には、元稹の「酬許語康佐本韻」の一節にある「生涯不繫舟」や、白居易の「想東遊五十韻 并序」に見える、「行行不繫舟」などの一節から、「うきたる舟」も漢詩から派生した語の一つであることを述べている。なお、白居易などの漢詩にある「浮生」とは「根なし草」のことで、「浮生」は小町の歌のテーマであるとも指摘している。

ちなみに、「不繫舟」との表現は、『源氏物語』にも確認できるものである。

「……あまりむげにうちゆるべ見放ちたるも、心やすくらうたきやうなれど、おのづから軽ろき方にぞおぼえはべるかし。繫がぬ舟の泛きたる例もげにあやなし。……」

(帚木①六八)

これは、雨夜の品定めにある、夫の浮気に対する妻の態度についての左馬頭の言である。夫をあまりにも好き勝手にさせておく妻について「軽ろき方」とし、これに対する男の状態を、「繫がぬ舟の泛きたる」と喩えている。「新編日本古典文学全集」は「文選」や「白氏文集」から「不繫舟」の語がある一節をあげている。ここでも、「不繫舟」は浮遊を表わし、また「舟の泛きたる」と、岸に繫がれていない舟が浮いている様に重ねられているのである。

ふたたび、明石の君と浮舟の「浮遊」に話を戻そう。明石の君と浮舟の人物造型の差異のもう一つは、「小野小町のなるもの」の

投影の有無である。明石の君には、直接的に小町詠を引歌とする表現を見出すことは難しい一方、浮舟はbの場面の後、「さそふ水あらば」と、小町歌「浮草」の引歌表現を用いている。この引歌表現は、浮舟が母や女房たちの言葉を聞きながら、わが身の破綻すること、すなわち「人笑へ」への危惧を自ら抱くことが語られる叙述の冒頭にあるもので、「浮きたる心地」、つまり「浮草」となった浮舟はこの後、宇治川という「水」に「さそわれる」とことになる。そして入水の後、小野で再生したものの、「うき舟」よりもさらに不安定な「うき木」を、自らの歌に詠むこととなるのである。

浮舟に見出すことのできる小町の歌は、「うき舟」（ただし小町詠は第一節であげた⑩の「うきたる舟」と「浮草」であり、これらが表出するのは、わが身のつたなさを嘆く女の姿である。浮舟のありようは、六条院入り以降の明石の君とは対照的なものであり、明石の君が回避した生き方を与えられているともいえよう。このような浮舟に、小町の歌の投影がより色濃く見出せるのである。つまり、浮舟の浮遊性が明石の君のそれと比してさらに鮮明になるのは、小町の歌が喚起させる「浮遊」なのである。

### おわりに

これまで、男君との身分差の恋を語られる明石の君と浮舟について、そのありようと歌ことばの喚起する意味について考えてきた。

浮舟の姿が最後に語られるのは夢浮橋巻であるが、この「浮橋」

について小町谷氏は、「うき舟」と「浮橋」との距離は、意外に近いのである」と述べている。この「夢浮橋」という語は、薄雲巻で源氏が大堰の明石の君のもとで過ごした際、「夢のわたりの浮橋か」とのみうち嘆かれて（薄雲②四四〇）と源氏の言葉として語られている。ここでは、儂い逢瀬をくり返すことへの嘆きの意であるが、「夢浮橋」に類似する語が、浮舟と明石の君に関わる叙述に見出せることもまた、この二人の女君の繋がりが浅くはないことを表わしているといえよう。明石の君から浮舟へ。「浮」ということばによって、二人の女君は繋がれているのである。

### 注

(1) 藤井貞和「物語を流れる水」(『源氏物語論』岩波書店、二〇〇〇年、初出一九八四年)は、明石の君と浮舟を「水の女」と捉え、そのあり方について言及している。

(2) 鈴木日出男編「源氏物語作中和歌一覽」(新編日本古典文学全集⑥巻末付録)による。

(3) 浮舟の和歌については、たとえば藤井貞和「歌人浮舟の成長―物語における和歌」(『源氏物語論』岩波書店、二〇〇〇年、初出一九八三年)は、最初は拙い和歌を詠んでいた浮舟が、物語が進むにつれて浮舟という一人の特質を持つ歌人となっていくことを指摘する。また手習歌については、小町谷照彦「手習いの君浮舟」(『王朝文学の歌ことば表現』若草書房、一九九七年、初出一九九三年)が、研究史を整理しながら、浮舟の贈歌は中将の君や中の君という、自らにとって庇護的な存在の女性を対象であり、答歌は、薫や匂宮などの男性に対して詠まれているなど、贈答の対象となる人物の異なることを指摘し、後

藤祥子「手習いの歌」(『講座源氏物語の世界』第九集、有斐閣、一九八四年)は、浮舟の手習歌は浮舟の人物像に大きく影響していることを述べ、松井健児「浮舟再生物語における独詠歌の位置」(『日本文学論究』四三、一九八四年一月)は、浮舟の手習は、自己と向き合うものであるとし、高田祐彦「浮舟物語と和歌」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三年、初出一九八六年)は、手習歌は独詠という自閉的なものであるゆえに、人との円滑な関係を築いていく機能を有していないことを指摘する。一方、山田利博「手習歌の機能」(『源氏物語の構造研究』新興社、二〇〇四年、初出一九八六年、一九八八年)は、「源氏物語」における手習歌には伝達性があることを述べ、吉野瑞恵「浮舟と手習」存在とことば」(『王朝物語の生成』『源氏物語』の発想・「日記文学」の形態』笠間書院、二〇一一年、初出一九八七年)は、浮舟の手習歌は浮舟自身の無意識下にある思いを照射するものであると指摘する。

(4) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)。

(5) 浮舟の「存在の不安」については、高橋亨「存在感覚の思想―『浮舟』について」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二年、初出一九七五年)。

(6) 和歌の引用は、断らない限り、すべて『新編日本国歌大観』による。

(7) 『うっほ物語』の引用は、室城秀之校注『うっほ物語 全改訂版』(おうふう、二〇〇一年)による。

(8) 小野小町実作とされる歌は、『古今集』十八首、『後撰集』四首、計三二首とされ、片桐洋一「小野小町集考」(『言語と文芸』四六卷、一九六六年五月)の指摘以来、『後撰集』にとられた小町作とされる歌には、実作か後代の人が小町に似せて作った

ものか、判断が難しい歌もあることが定説となっている。当該歌もその一つであるが、『後撰集』以降、当該歌は、寄る辺ない、たゆたう心情を表出する小町の詠歌として認識されていた。田中隆昭「浮舟と水鳥と」(『源氏物語 引用の研究』勉誠出版、一九九九年、初出一九八六年)。

(10) 小町谷照彦「うき舟」考」(『王朝文学の歌ことば表現』若草書房、一九九七年、初出一九八一年)。三八七頁。

(11) 歌語「うき木」の用例については、田中論文(前掲注9)に同じ。が(1)をあげている。また、後藤祥子「浮木にのつて天の河にゆく話―松風」手習」の歌語」(『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、一九八六年、初出一九八三年)が(4)(12)(13)(14)をあげ、さらに、佐藤佳代子「浮木」考」(『解釈』四三巻二号、一九九七年二月)が(2)(3)(4)(5)(8)(10)(11)(12)(13)(14)について言及している。小稿では、新たに(6)(7)(9)の歌をあげる。

(12) 後藤論文(前掲注11)に同じ。

(13) 河野貴美子「うき木にのる明石の君」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.20 総合・松風』国文学解釈と鑑賞別冊第二〇巻、一九九九年一月)。

(14) 佐藤論文(前掲注11)に同じ。

(15) 吉井美弥子「浮舟物語における七夕伝説」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社、二〇〇八年、初出一九八八年)。

(16) 阿部秋生「明石の君の結婚」(『源氏物語研究序説 下』東京大学出版会、一九九九年)。

(17) ここでの源氏と明石の君の再会について、竹内正彦「再会の住吉―『澹標』巻の住吉参詣における明石君―」(『源氏物語発生源史論―明石一族の地平―』新興社、二〇〇七年)は、二人の懸隔から、「住吉参詣」と「再会譚」の話題によって捉える。また、斎藤暁子「澹標巻における明石上」(『源氏物語の研究史』

教育出版センター、一九七九年）は、源氏一行を目の当たりにして、明石の君が抱く「たけき」思いが打ち砕かれてしまうことを指摘する。

- (18) ここに描かれる「遊女ども」については、小山利彦「源氏物語と住吉信仰」（『源氏物語 宮廷行事の展開』桜楓社、一九九一年）に詳しい。また、竹田誠子「住吉詣における明石君登場の意義」（『中古文学』四九号、一九九二年六月）や、同、「住吉詣と明石君の遊女性」（『武蔵野女子大学紀要』二九号、一九九四年三月）は、明石の君に見出せる「遊女性」について指摘する。

- (19) 井上真弓「男の歌が女の境涯を導く時」（『狭衣物語の語りと引用』笠間書院、二〇〇五年、初出二〇〇〇年）。

- (20) 吉野論文（前掲注3に同じ）や、井上論文（前掲注19に同じ）。なお、田中仁「浮舟の歌—浮舟・雪・雲」（『国語国文』一九九三年四月）『研究講座源氏物語の視界』5 薫から浮舟へ』新典社、一九九七年所収）は、「うき舟」は、匂宮と浮舟の乗った舟のことであると指摘する。

- (21) 前掲注2「源氏物語作中和歌一覧」を参照した。

- (22) 小野小町と作品との関係については、たとえば、有田裕子「藤壺の夢の感覚—『源氏物語』と小野小町—」（『成蹊国文』三八号、二〇〇五年三月）や、服部友香「住吉物語」と小野小町—引用された小町詠のはたす役割を中心に—」（『中古文学』八三号、二〇〇九年）などの論考がある。

- (23) 後藤祥子「小野小町試論」（『日本女子大学紀要』第二七号、一九七八年三月）。後藤氏は、小町歌には漢詩の影響があるとし、夢の歌群と漢詩「閨怨」における「夢」の詠まれ方について指摘している。

- (24) 以下、『白氏文集』の引用は、『新釈漢文大系』による。

- (25) 『元氏長慶集』の引用は、『四部叢刊初印縮本』（台湾商務印書館、一九六五年）による。

- (26) 大塚英子「小野小町—コレクション 日本歌人選03」（笠間書院、二〇一一年）。なお、大塚氏は、「春閨怨」にある表現では、夫のいない寝室において、女性自身が「浮萍」に喩えており、小町歌においても「浮草」は自己の喩えとして用いられていることから、浮草は「浮萍」の翻訳語であるとする。

- (27) 大塚英子「小野小町における掛詞生成試論—「身をう（浮・憂）き草」から「うき世」へ—」（『古今集小町歌生成原論』笠間書院、二〇一一年、初出二〇〇七年）。

- (28) 雨夜の品定めでは、「中の品」の女の恋を、その主題とする。この後に語られる中の品の女君空蟬について紀伊守が源氏に語った言葉に、「不意に、かくてもおしはべるなり。世の中といふもの、さのみこそ、今も昔も定まりたることはべらね。中についても、女の宿世はいと浮かびたるなむあはれにはべる」など聞こえさす。（『帯木①九六』）とある。これについて『新日本古典文学大系』には、「なかんずく、女の持つて生まれた宿運はふわふわと根なしであることが、階級を落とすことによりその階級の男と結婚する関係を言う」との説明がなされている。「中の品」すなわち中流貴族の女君といえ、明石の君もこれに当てはまる。また、笹川博司「紫式部集全釈 私家集全釈叢書三九」（風間書房、二〇一四年）は、浮舟の人物造型と「女の宿世はいと浮かびたるなむ」について、⑩にあげた紫式部詠の「かきくもり」歌からの影響を読み取る。

- (29) 秋山虔「小野小町のなるもの」（『王朝女流文学の形成』塙書房、一九六七年）。

- (30) 大塚英子氏は、『小野小町—コレクション 日本歌人選03』（前掲注26に同じ）において、⑩であげた『後撰集』小町詠の「心

から―」の「うきたる舟」から浮舟へ小町の歌の影響があると  
し、「うきたる舟に乗るところか」「うきたる舟に浮き木」その  
ものになっている。紫式部に「小町」は確かに継承されていた  
と述べている。

(31) 伊東玉美『小野小町―人と文学』（勉強出版、二〇〇七年）  
は、⑩であげた『後撰集』の「心から―」歌について、「浪に  
揺られ、たゆとうよるべない女、としてとらえようという、編  
者の、あるいは時代の意識が見てとれる。当時、水辺に縁の深  
い漂う女性といえは第一に浮かぶのは、「遊女」のイメージで  
ある」と指摘する。

(32) 小町谷論文（前掲注10に同じ）。三九八頁。

※『源氏物語』本文は『新編日本古典文学全集』より引用した。

( ) 内は、巻名・巻数・頁数を示している。

(おおたけあかり 大学院博士後期課程在學生)